

かぐらおか

第 71 号

平成 4 年 3 月 25 日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は初代学長 山田 守英氏)



第 13 期 卒業生

第14期生を送るにあたって……学 長… 2
 第14期卒業生を送るにあたって…小川 秀道… 3
 旭川医科大学第14回卒業生名簿……… 4
 卒業するにあたって………碓井 正… 4
 六年間という時間の中で………梅津 暁子… 5
 卒業にあたって………柳川 伸幸… 5
 退官にあたって 一法医学36年間の思い出ー … 石橋 宏… 6
 退官にあたって 一闊の歳月ー …… 小野寺壮吉… 7
 退官にあたって 一言い残したいことー …… 保坂 明朗… 8
 退官にあたって 一内科学から臨床検査医学へー 牧野 幹男… 9
 退官にあたって 一創業と守成といずれが難きかー 美甘 和哉… 10
 助教授に昇任して………衛藤 雅昭… 11
 スキー教室で留学生と交流深める …… 11
 1年のあゆみ……… 12

原田教授「旭川市文化奨励賞」受賞……… 14
 新歓合宿のお知らせ……… 14
 学生団体の設立・継続届について……… 14
 病院ロビーでクリスマスコンサート行われる… 14
 教官の異動……… 14
 平成4年度の地区体について……… 15
 課外活動短信……… 15
 旭川医大に留学して………談 勇… 16
 平成4年度前期分授業料免除及び
 延納・分納について……… 17
 平成4年度日本育英会奨学生の募集について… 17
 学生教育研究災害傷害保険の加入について… 17
 20才以上の学生の国民年金への加入について… 18
 窓 外………林 由紀子… 18



第14期生を送るにあたって

学長 清水 哲也

第14期生の皆さん、卒業おめでとう!!

一般教育から始まって、基礎医学、そして臨床医学教育に至る長い期間の学習努力が報いられ、今、学士学位記を手にした皆さん、そしてやさしい慈愛のまなざしで見守ってこられたご父兄の皆様のお気持ちに思いを馳せるにつけ、私自身も萬感の想いまさに胸に迫るものがあります。この想いは只単に私一人にとどまらず、教育に当られた全教官に共通した感慨でもあります。

とくに第14期生の皆さんからは、「卒業証書授与式」という言葉にかかわって、「学士学位記授与式」にかわった意味合いを十分にかみしめて頂きたいと思います。

このことは単なる字句の変更ではないのです。大学審議会の答申に基づく改革の一つであって、今、日本の大学をとりまく環境が国際性を身につけることが殊の外強く望まれていることは周知のところではありますが、その国際化に対処した措置であることに第14期生の皆さんは思いを新たにして頂きたいのです。

さいはての地にある医科大学を卒業してもその気宇を一層壮大にして、国際性豊かな医学者になって頂きたいという国家社会の心からなる願望の表現なのです。

医学者の素地として要求されるものは積極的な国際性につけ加えて、豊かな人間性であります。

患者さんの痛みを、人の痛みを我が痛みととらえることのできる医療人に是非なってほしいということです。

常にその手のひらのぬくもりが病める人達に伝わっていくような対応ができる医師になってほしいのです。

皆さんの目の前におられる患者さんは、不幸にして病を得て来院される結果になってはいるものの、人生を生き抜く見識や学識、人生経験については若い皆さんよりはるかにその年輪を重ねておられる人生の先達ばかりなのです。

医師という職業が社会のなかで「存在価値」があるのは、ただ単に診断や治療の技術がすぐれているからではないのです。

高い倫理性に裏づけされた「医の心」、「医の原点」に立脚しているが故にこそ信頼され、尊敬されるのです。

くりかえしますが、医の原点はあくまでも単なる技術

のみでなく、医の心、患者さんの痛みを我が痛みとしてとらえられ、患者さんをいたわってあげる心に満ち満ちていること、自己を犠牲にしても患者さんの幸せのために尽くすことのできる職業であるが故に、「プロフェッショナルフリーダム」ということを声高に主張しうるので

す。自由には強烈な責任感を常に伴うことは、今、私があらためて申し上げるまでもないところです。

医師の責任としてもう一つ片時も忘れてならないことは、「生涯学習」です。

医師程、「生涯学習」に徹しなければならない職業は他にはないでしょう。

ことはただちに人命にかかわるが故に当然といえば当然でありましょう。

人生とは、生涯「重荷」を背負って歩くが如しという「たとえ」がありますが、医師という天職こそまさに「生涯学習」ないしは「生涯研修」を旨とするが故に社会的にも存在感があるのです。

逆にいえば「生涯学習」の精神を失った医師は、病める人達や社会から、一瞬にして信頼を失う厳しい立場に立たされるのです。

個々の症状に眼を奪われてしまった、単なる技術中心の浅薄な職業人ではなく、その病を荷っている患者さんの全体像を豊かな感性と、そして鋭い洞察力をもって把握できる心やさしい医師になってほしいのです。

心豊かな医師とは、換言すれば教を乞うたその道の先達への畏敬の念きわめて篤く、また後輩に対しては、六月のそよ風にも似た、さわやかさをもって接しうる人のことでもあります。

皆さん、今日という日は「こと」のおわりではなく、まさにもって「こと」のはじまりであります。一日一日を大切に、健康に留意されご活躍ください。



第14期卒業生を送るにあたって

14期生担当
(麻醉学講座 教授) 小川 秀道

14期生の諸君、ご卒業おめでとう。

医学を志し、良き医師、良き研究者にならんことを目指して学んだ6年間は諸君にとって決して平坦な道のりではなかったであろうが、それだけにここに卒業の春を迎えられてその喜びもまたひとしおであろう。心からお祝い申し上げる。

同時にこれまで経済的にも精神的にも陰ひななく援助を続けてこられたご家族や、君達の成長、目的達成に心を砕き、直接的、間接的に支援されてきた多くの方々がおられることを忘れてはならない。その感謝の気持を是非これからの社会活動を通して世の人々に還元して貰いたい。

さて、大学ことに医科大学の卒業はひとつの区切りであって決してゴールではない。間もなく訪れる国家試験をクリアさえすれば、知的専門職としての医師行為が始まる。まさに医師としての人生のスタートポイントである。

今こそここで入学前から希望し、入学後培われた良き医師像を反芻しこれに到達すべく決意を新たにして頂きたい。

良医として社会的責任を全うする上に必要な基礎的条項は諸君も十分に認識しておられることと思うが、ヒポクラテスと並び世界の二大医聖の1人であるガレンは、既に2,000年も前に「最高の診療は医師と患者の“限らない信頼”と“深い愛情”によって築かれる」と述べている。昨今、単に医学知識の伝達、医療技術の行使に走りがちな医師への苦言ともとれるが、本来愛情から派生するところの労り、思いやりは医の原点であり医人の持つべき心でもある。これを全うせんがための医学的知識の蓄積、高度医療技術の習得であり、医学的研究の推進もそのためにあるといつてよい。

これらを踏まえて諸君は今その緒に着こうとしている。医療機関に携わる者の1人として大いに期待もし、またこれからの楽しみでもある。

さてここからは、これから医師あるいは医学研究者として研鑽の第一歩を踏み出す諸君に2、3の心掛けを伝え、はなむけの言葉に換えさせて頂く。

1. 諸君はこの6年間の修学課程を終え、断片的かも知れないがそれぞれの領域における現時点での最高水準の医学知識と医療技術の概要を学びとったことになる。しかし医学の進歩はまさに日進月歩であり、3年、5年後にはその水準も大きく変貌することを考えておかななくてはならない。十年一昔と言われるが“学問の世界では一年一昔と”考えねばならない。生涯教育が叫ばれる現今であるが、今日直ちにこのことを念頭に置き研鑽に励んで頂きたい。科

学者としての素養の第一歩は断えることなき好奇心と言われるが、医学の領域でも異なるものではない。諸領域に目を配りそれらに精通することは容易なことではない。しかし知らざるを恥じず、知らんと欲せざるを恥ずの心掛けは是非持ち続けて貰いたいと願うものである。

2. 諸君の多くは卒業後医学の中でも細分化された各専門分野に進み、それぞれの部門において研究あるいは研修を開始することになる。各領域における専門医の養成は、医療機関あるいは研修施設を持つべき機能であり、はっきりした目的の一つにもなっているが、過度の専門分化は研究面ではともかく、医療の面では必ずしも得策ではない。これからは各専門医を目指す諸君が、それぞれの専門技術をどのように生かすか、効率的な生かし方をするにはどのようにすべきであるかを考えながら診療に当たって頂きたい。かつてそれぞれが、木を見て森を見ずの喩えで表現されかねなかった各専門医による診療を、できることならその幾面かずつでも multidisciplinary な approach がとれないものかと念じている。

3. 今やわが国は経済大国となり、ODA政策にもみられるように、世界に貢献しなければならない立場にある。医学の世界でも、かつて欧米先進諸国から教育援助を受け、医療技術も輸入が主体であった時代から、逆に途上国への教育指導や技術援助を求められる時代になっている。交通手段が発達したこともあり国際間の交流が極めて頻繁になされ、国際学会や国際シンポジウムの開催も目白押しである。今後は早くから国際人としての感覚を身につけ、国内と同等に国際社会で貢献し活躍できる医師になって欲しいと願っている。

4. 今後諸君が医師としてまた社会人として活動する場合、予想だにしない数多くの人々と接し係りを持つことになるが、中でも大切なのは信頼でき頼りになる朋友であろう。

この場合、最も身近かなところで接した期間も長く、かつ分野は多少異なるにしても同じ医学を志して共に学んだ同期生が最も頼りになることは古今を問わず間違いのない。かつて同期の桜などと言って謳われたように、同期生の間柄には比類なき良さがある。そしてこの交友関係は5年過ぎ、10年経って年を取ればとる程、親密となりその絆も堅くなるもので、これは不思議でもある。現段階ではこの関係を理解しえないかも知れないが、ともあれ諸君は旭川医科大学の14期同期生同志なのである。お互い切磋琢磨し、時に励まし合い、協力し合って世界に羽ばたき、大いに人生を謳歌して頂きたい。ご活躍を祈る。

卒業するにあたって

第6学年 碓井 正



かぐらおかの原稿を引き受けたはいいが、締切りまで早一日を残すのみとなり何を書いたらいいのか、例年の諸先輩方の文を参考にしようと見ていると、一つは六年間を回想的につづ

たもの、もう一つは六年間のクラブ活動などに打ち込んだ活動集の様なものとの二つに分けられると思った。

そこで私は例年の方々と少し異なる内容について書きたいと考え、思いつくままに筆を進めたいと思う。「少年老いやすく、学なり難し」とは孔子の言葉であるが、六年間は本当に瞬く間にすぎ去ってしまった気がする。我々は医学という学問のほんの入門部を終えようとしているだけで前途には広大な開拓された、或いは未開の知の森が広がっている。前者を知るということは、これから先も日々勉強をおしまず推進して行くことであり、後者を開拓して行くことは日頃、疑問に思っていることを追究して行くことであり、医をどういう型であれ学ぶものとしては、何か一つでも良いから自分の力で未知の分野を切り開き先鞭をつけたいと考えるのは当然のことであろう。私は実際に臨床医学の一部門を専攻す

るに当たって、これらの事を忘れず従事していきたいと思っている。

また以前、ある先生が新約聖書の中のルカ伝の金持ちと貧乏なラザロのたとえ話をしてくださった。これはいい話だと思い心に残っているのであるが、私もこの話の中でたとえられているこのような人間的医療が出来るよう常に心に留めて行きたいと思っている。近年の日本も百才の双子のおばあちゃんがTV出演する様な世の中になり、これからの我々にとっては、医療という現場で求められているものも変化し増してくると思われ、責任という面でも重くなることが考えられる。しかし、医学にたずさわる者として、これから先も勉強にはげむことをおしまず、医療について考えていけたらすてきではないかと思う次第である。

以上の様に卒業を迎えてというよりは、今後の抱負の様なものを書いてしまった。

しかしながら卒業という一つの人生の区切りを迎え、これからは余り区切りのない年齢を迎えていく前に、これから先の一つの目標を掲げておくのも卒業には悪くないことであろうと思う。

最後に六年間お世話になった先生方、そして同級生の方々と、本当にありがとう、大変感謝しています。これからはお互いに、がんばりましょう。

六年間という時間の中で

第6学年 梅津 暁子



今から何ヶ月か前に6年間を振り返った時、あっという間であったと思っていた。しかし卒業までわずかな時間を残した今、実はとても長い6年間ではなかったかと思い始めている。

大学に入って一番大きな変化は、一人で暮らした事だった。それまでは家族と一緒にのせい、自分自身に向けた注意というのはそれほど多くなかった様に思う。しかし一人でいる時間が長くなると、いやでも自分と真正面から向きあうようになり、私の知らない私が次々と現れて驚かされた。例えば、それまでは何かを観て感動が大きくても泣く様な事はなかった。それが一人でTVを観ている時に、はっと気がつくハラハラと涙を流していたり、スポーツの中継を観て一人で叫んでいるのだ。初めて泣いた時は驚きのあまりしばらく呆然としてしまった。これを最初として、思っていたよりもずっと感情的である自分を知るのだが、この他にもずいぶんと自分の本音を見つけてきた。初めはとまどう事も多かったが、そのうちそんな自分と一つ一つぶつかりながらも納得しながら次へ進む様になった。今では、これまでの中で、最も

自分に素直で忠実であったのはこの6年間だったかもしれないとさえ思っている。

自分自身とつきあう時間が多かった反面、様々な人達との交流も多かった。クラスの中で、部活動で、学外で、年齢も先生方から中高生まで、国籍も様々と、こうして考えるとその範囲が広がった事に自分も驚く。これだけ広い範囲という事は、そのぶん私とのギャップが大きいことになるわけで、その中ではお互いの思いが行き違い、うまくゆかずに苦しんだ事もあった。けれど、そんな時はいつも、相手が譲ってくれたり、第三者が救ってくれたりして問題は解決した。わがままな私は何もせずに、ただ感謝するだけだった。しかしその後、かえって交流が深まったりするから、人間関係は不思議であり、おもしろいと思う。6年間の中で出会った人達のおかげで、私はどんなに成長させてもらったことだろう。

大学生生活の思い出は、そのほとんどが誰かとの思い出である。そうして振り返ってみると、おきた事が次から次へと甦ってきて、本当に6年間ですいぶんたくさんの事があったものだと思う。やはり6年間は長い時間ではなかったかと思うのだ。けれど、長くても全てが私の時間として大切なのである。その中のどの一瞬が欠けても今の私はない。

この6年間の中で起きた出来事、そして出会ってきた人達、全てを大切に胸に残して卒業していきたいと思う。6年間、本当にありがとうございました。

卒業にあたって

第6学年 柳川 伸幸



昭和61年4月入学以来、数多くの先輩方を送り出してきて、いざ今度は自分自身が送り出される番であることをふと我にかえて考えてみると、手離して喜べない複雑な心境である。自分の大学生生活が本当に有意義なものであったのか、確認

する意味も含めて6年間を振り返ってみたい。

入学当初は、大学に入学できたという安堵感と受験勉強からの開放感とで、時の流れるまま無為な時間を過ごしていたような気がする。学生の本分は学業であることは分かっている、目先のものにとらわれて、進級試験に通じさえすればいいと安易な試験勉強で2年生に進級してしまったような気がする。そんな一般教育も、もう終盤にさしかかろうとしていたある日のこと、私にとって人生の転機(?)とも言える2つの大きな出来事がほとんど時を同じくして起こったのである。

一つは哲学の岡田教授の「医師になろうとする者が医学のみに精通しても、他の学問にあまり関心を持たないこと程、寂しいものはない。」というお言葉である。医学部に入って、なぜそれ以外の勉強をせねばならないのかと思ってい

た私にとって、医師のあり方というものを啓示して下さいたいありがたいお言葉であると感謝している。もう一つは、私が生物学の実習書をたびたび注意されたのに返却しなかった時の事である。後日、生物学教室にそれを返却に行くと、美甘教授がいらっしやって、「約束を守れない者が医師になろうとするなど以ての外だ。そんな気持ちで医師になろうとする事は許されない。」というお言葉である。この時ほど、留年を覚悟した時はなかった。

これら二教授のお言葉、お叱りのお蔭で、それまで怠惰で怠慢であった自分が、少しは更生する事ができ、また、医学生として、医師になろうとする者として、その厳しさや医師としての人格養成のためのきっかけを作った事に対して感謝に堪えない。

その後は、基礎や臨床の勉強にかかわらず、十分とは言えないが、先の事を見据えた勉強、物事の考え方ができるようになったと思う。学業のみならず、クラブ活動(弓道部に6年間在籍)においても、人間の縦のつながりや横のつながり、集団を動かす事の難しさ、良き先輩、後輩達との出会いや学外の方々(特にご老人)との交流の楽しさ、大会で皆の努力が実って賞を戴くことの喜びを味わう事ができ、私は幸せだったと思う。

最後に学問の修得、人間性においてまだまだ未熟ではあるが、この様なすばらしい教育の場を与えて下さった諸先生、職員の方々、いつも力になってくれた両親に対して深く感謝したい。



退官にあたって

— 法医学36年間の思い出 —

法医学講座教授 石橋 宏

昭和31年に北大法医学教室に研究生として入ってから今年まで36年が経過した。旭川にきたのが昭和50年なので、36年間のうち17年は旭川医大で過ごしたことになる。

法医学教室に入る前の5年間は札幌医大の産婦人科学教室で臨床の勉強をしていた。

法医学を専攻するようになった動機を書かなければならないと思うが、私が産婦人科医として道内の或る病院に出張していた時に強姦事件の被害者の診断書を書いたことがあった。大腿内側に爪でできたと考えられる三日月型の表皮剥脱があったので、成傷器は人間の爪と判断し、その旨を診断書に記載した。ところが、それが裁判となり法廷に証人として召喚された。被告側の弁護士から「現場は鎌で刺された熊笹が生えていたので、その切口が被害者の大腿に接触すれば人間の爪のような形の創傷ができませんか」と質問された。それもそうだと思う「できる」と答えた。すると弁護士はすかさず「貴方が人間の爪とした理由をのべて下さい」と追打ちをかけてきた。

法医学では成傷器を具体的な名称で表現しないのが原則であるが、当時の私はそういうことも知らず、強姦に対する義憤で診断書を書いたように記憶している。その後はすっかりあがってしまい、しどろもどろの答弁を繰り返して、黒と言っていた筈なのに白と言っている自分に気付きながらその軌道を修正することができず、言葉に表せない屈辱を受けて退廷した。

それで法廷に証人として立った場合、堂々と答弁できるようにならなければならないと思い、法医学を少し勉強してもう一度臨床に戻る積りで法医学教室に入った。これは弁護人を含めた裁判所に対する私憤をはらすためといったもので自慢できるものではない。

法医学教室に入ってから2年くらい経った頃、道南の町で母親と娘が3人組の強盗に殺害される事件が起こった。娘の腹腔内容検査を行ったところ精液が認められ、その血液型はAB型であった。娘の血液型はO型なので、犯人はAB型ということになるが、強姦を自供している男はB型であり、教授から本当にAB型かと問われ、検査を繰り返したがやはりAB型と出る。何となく割り切れない想いを抱いていたが、公判中にもう一人の男が強姦を自供し、その血液型はA型であった。臍内にB型とA型の精液が混在していたためAB型と判定されたことになる。最近では精液のDNAを判定することによって犯人を断定する方法が採られているが、血液型の判定も重要な決め手であることには変わりはない。

このことは若い私に非常に有益な教訓を与えてくれた。すなわち、実験のdataは率直に受け取らなければならない。予想に反したdataを捨てることは非常に危険である。理論的に考えられない結果が出た場合、この結果は現在の科学が未だつかんでいない貴重な宝石が顔の一部をちらっと出しているかも知れないと考えることである。

この経験が二度と臨床に戻らず法医学を36年間続けることになった。そして、この考え方が以後の私のバックボーンとなり、色々な研究を続けることができた。退官を迎えるに当たって、若い時の経験が人生を変える程の影響を与えてくれるものだと感じている。

学生諸君には動機はどうであれ、一つの学問を続けて行けば必ず面白くなるものであり、たとえ法医学の試験成績が悪くても、法医学を続けて勉強すれば立派な法医学者になれると言いたい。

昭和49年の春に大学建設予定地を見にきたが、現在の大学が建っているあたりは粘土地で、ブルドーザーが粘土の中に埋まっていた。果してこゝに新しい大学ができるのだろうかと不安を覚えた。昭和50年8月8日に仮教室があった市立旭川病院から完成した基礎臨床研究棟に入り、それから新しい教室作りが始まった。新しい教室を作るのは生まれて初めての経験なので随分苦労が多かった。釘一本から用意しなければならなかったから、設計し注文していた新しい実験台が据え付けられた時の喜びは今でも忘れられない。

臨床の外来に相当する司法解剖は昭和50年から平成3年までに701体になり、大学の法医学教室として少しは社会に貢献できたと考えている。

本学も開学以来18年が経過し、卒業生も1,000名を越え道内は勿論、道外でも活躍している。もう新設医大という名称を自ら外す時期がきていると思われる。

長い間の私に対する御支援に感謝するとともに本学の益々の発展を心から祈念して最後の寄稿としたい。



(最終講義)



退官にあたって

— 岡 の 歳 月 —

内科学第一講座教授 小野寺 壮 吉

一月の末に、動物実験のことなどで時折ご教示にあずかっている美甘教授から電話を頂戴しました。お話は専門のことではなく、退官にあたって「かくらおか」に執筆のお薦めでした。何うと、現在広報誌編集委員長でおられる由、同じ時期に退官のご同役からのお話で、まことに痛み入った次第です。喜んで書かせて戴く旨ご返事致しました。

昔話をさせてもらいますと、昭和48年に美甘教授と一緒に旭川医大の工事の進行具合を眺めに神楽岡にやってきたことがあります。旭川医科大学設置関係法案の国会審議は進まず、大学創設準備室は既に北大から旭川の仮校舎（北門町）に移ってきており、のびのびになっている開学に備えて満を持していた頃のことです。私は図書館のことを担当するよういわれておりましたので、予定されている部屋を覗いてみると、職員がひとりだけ書物の山の間で、いかにもひっそりと仕事を続けていたことを思い出します。神楽岡では、その年に分譲された病院の真向いの新しい団地の区画がまだ造成中でしたから、初夏の頃であったように思います。

その年5月に起工された一般教育の建物の近くの現地工事事務所のあたりで、周囲にひろがる水田跡地を眺めて、完成した大学を想像したものです。神楽岡とのご縁の始まりです。

やがて、緑が丘団地の2期工事が完成して、その一面に現在のわが家をつくることができ、昭和49年冬からこれで17年余を神楽岡で過ごしたことになります。

雪の季節のほかは団地のなかの小道伝いに大学に通いました。黒田元学長、奥野教授、藤沢教授のお宅の傍を通り過ぎます。年とともに道沿いの茂みは濃くなり、住宅は少しずつ増改築され、住む人も入れかわり、春、夏、短い秋それぞれの風情も楽しく、とくに時候のよい折は通勤というより散歩をしているようなものです。

この数年、キャンパスは整備され、樹木は根づいて大きくなり、大学も年輪を重ねつつあることを感じさせます。大学の北側の団地との境の環状線沿いのイタリヤポプラの列やそれと並ぶ松の成育ぶりも見事なものです。バス通りのプラタナスも緑の季節には程よい木陰をつくり、歩行者も運転者も、まちの落ちつきと豊かさを感じるようです。

附属病院8階病棟から眺めると、北側の団地や旭川中心街の眺望と異なり、南側は開院当時とはグラウンドの先は何もなく、秋の深まる頃からは回診の途中です。

暗くなり、点在する燈火と一定のリズムで点滅する旭川空港の標識燈がわずかに人の営みを知らせるばかりでした。最近新しい住宅が連なって、夜、家々の明かりは眺める人に安らぎを与えてくれるようです。病を養う人には夜が一段と淋しいものです。

わが家の寝室は南に面しており窓から病院がよく見えるので、やすむ前にカーテンをちょっと寄せて病棟の方を眺めます。重症者の個室は病棟の北側に並んでいますが、そういう部屋の明かりが夜遅くまでついているのは、私共にとって心平かなことではありません。昼間の仕事から心理的に解放されないことになるかも知れませんが、長い間に身についた動作の一つです。

旭川の春は素敵です。5月に入ると一斉に緑が萌えて、その勢いに自然が沸き立っているように感じることがあります。病院の前庭のエゾムラサキツツジは早春の彩りの一つです。この十数年間に体験した旭川の四季とは、とりもなおさず神楽岡の四季でした。岡の上の夏の雲、日ごとに色彩の変わる秋、四季それぞれの日没の風景、折々の記憶は尽きないのですが、なかでも樹氷やダイヤモンドゲストなど冬の印象はとくに鮮烈です。

大学の隣接地に新しい建築物が次々と加わり、かつてのまちはずれに大学があるという風景から、大学を中心としたまちなみというたまたまになってきました。孤高というものも悪くありませんが、いかにも地域に溶けこんだという現在の方がずっと好ましい姿です。情報センターとしての大学のもつ先見性と附属病院の高度医療体制は、地域の専門家にとっては強い支えであり、市民にとっても大きな利益です。旭川医大の専門的能力の蓄積は引き続き厚くなりつつあるので、北方の知的拠点の一つとしてますます存在を主張してもらいたいし、またそうしなければならぬ時になっていると思います。



(最終講義)



退官にあたって

— 言い残したいこと —

眼科学講座教授 保坂明郎

新しい大学を作ろうという希望に燃えて着任してから、満17年が経過した。在職中、二度の入院で数箇月のブランクがあり、御迷惑をかけたが、今は健康で停年を迎えることができたのは皆様のお蔭と感謝の気持ちで一杯である。一人の平凡な人間にとって、48歳から65歳までという、いわば仕事の完成期ともいべき時期を、この旭川医科大学で、それこそ大過なく過ごせたということは本当に嬉しい限りである。

私は元来（意外にも）積み上げ型の人間であるから、突如として眼をみはらせるような仕事はできないが、それなりの努力で、どうやら所期の目的は果たして来たと自負している。学問的には30年来のテーマである近視に取り組んできた。今や近視が眼軸延長によることは確実であるが、その発生機構は残念ながら未だに謎である。しかし電気生理学的検討、猿の実験近視、フルオロフォトメトリーなど、とくに本学卒業生の新しいアプローチにより、早期近視ですでに血液眼内柵の障害のあることが確かめられ、以後はそれが何故起こるかについて検討中で、今後のいっそうの発展が期待される。

診療面では、日本の網膜剥離治療が立ち遅れている（とくに北海道はレベルが低かった）現状を早急に改革する必要があった。それには若い教員を専門の施設に送り込んで教育して貰う必要性を痛感した。幸いにもこの分野では世界で屈指の Retina Foundation (Eye Research Institute) (Boston, 所長は有名な Dr. Schepens) と協定ができ、現在もほぼ2年交代で2人の教員を派遣している。その後世界的な糖尿病の激増から、同研究所でいち早く硝子体切除術 (vitrectomy) が行われるようになり、当教室ではこの手術を早くから採用することができた。また同時に、とくに留学経験者の中に網膜・硝子体疾患への関心が高まり、基礎的研究を重ね、現在では Boston との協同研究による成果が上がっている。中でも網脈絡膜の物質代謝の研究が近視の研究においても有力な手段になっていることは特筆に値する。

さて地域医療の重要性が唱えられて久しいが、眼科については眼科医の絶対数の不足のみならず、札幌を中心とした都市集中性が著しく、地方では眼科医不足に頭を悩ましていた。当教室では主要都市の公的病院から補充して行き、必要に応じて拡大するという方針をとった。病院の性格上、俸給は多少低く、また病院間の隔差があるにしても、地域病院の育成に力を貸すべきだと判断したからである。ただし診断・治療用機材はできる限り最

新のものも揃えて、派遣医局員のやる気をなくさないような配慮をして頂いた。現在、道内10数箇所（2-3年の内には数箇所増）の関連病院を持っている。これは道内主要公的病院の半数に近い。現在は皆若いので、1-2年の交代制をとっているが、数年後には何とか固定制にすることができると思っている。

教室内では「何でも相談でき、何でも言いあえる雰囲気」作りを目標として来た。一番の年長者でさえ私と25歳も違うので、このことは自戒の意味も含めたつもりである。この頃は両親でさえ昭和二桁という人が多いので、少し遠慮が出て来ているようなのは淋しい。是非教室の伝統として残して貰いたいと思う。既成価値感や概念の中に固まると、新しい研究発想が生まれて来ないからである。研究費の面では私のテーマの関係もあって資金援助が少なく、教室には不自由な思いをさせたという思いがある。業績が増すとともに、この点も緩和されることを願っている。

大学全般についても研究費が余りにも過少である。これは以前から言われていることだが、日本人全体の「どんなことに金を使うべきか」の意見が変わらない限り、変わる見込はないと、この頃は諦めの境地に達してきた（ただし今後益々声を大にして国民の意識を引き上げる努力は必要である）。この点で、本学の機器センター、動物実験施設は「人間の知恵の反映」ともいえるだろう。そもそもは当局の示唆があったのかも知れないが、資金不足の弱小大学では、重要研究機材を一箇所に集めて共同利用するという運営方針は理に叶ったもので、近年益々利用度が高まっていることは喜ばしい。ただ物によっては使用頻度が高く混雑する事態も生じており、また使用後の整理整頓が悪い人も居るようで、資金面を含め、スムーズな運営には利用者各位のいっそうの自覚が要求されるようである。

全く関係ないが最後に一つ。本学のクラブ活動の1つとして詠曲部を企てたが遂に希望者が少なく、残念であった。



(最終講義)



退官にあたって

— 内科学から臨床検査医学へ —

臨床検査医学講座教授 牧野 幹 男

昭和51年10月、本学附属病院の開院に合わせて着任して以来、またたく間に15年余が過ぎてしまいました。新しい大学、新しい病院を作るという仕事に直面することは、人々にとってめったに遭遇しない、光栄ある機会であることを、附属病院開院式に列席して、心に沁みて感じたことを覚えています。当時は学内のあらゆる部門の職員が、それぞれの立場を越えて、新しいものをつくるという共通の目標に向かって心をつ一つにして議論を繰り返していたことを、なつかしく思い出します。教授会でも夕食をはきんで、深夜に及んで討論が行われたことも珍しくありませんでした。今振り返ってみて、あの当時の熱気とエネルギーはどこに行ってしまったのだろうと思うことがあります。それぞれ自分の仕事に精を出しておられるのですが、時には大声で白熱した議論があった方が面白いと思います。

私は北大卒業後、生理学教室を経て北大第一内科に入局し内科医を志しました。その後、米国に留学し、内科学と病理学レジデントとして5年間勉強をさせていただきました。その間、肺疾患に関心をもち、とくに肺気腫の臨床、呼吸生理学、病理形態学を勉強する機会に恵まれました。5年間のレジデント生活は、また一方では言葉との斗いでもありました。研究室で動物を相手にする仕事とは異なり、臨床で患者さん相手の仕事ですから、大変な苦しみでもありました。渡米する前に特に言葉の準備をした訳でもありませんので、普通に話されてもよく分からないのに、患者さんがモゴモゴ言う言葉など分かるはずありません。昼、夜となくレジデント同志や、アテンディング医師との間で討論が行われますが、論議が白熱してくると、こちらが5つ言う間に10言われてしまい、口惜しい思いをしたことが何回もあります。

帰国後も呼吸器病理の仕事を受け、もう一度最初から見直すつもりで、肺胞数の算定や肺胞表面積の計測を行いました。また肺気腫や慢性気管支炎の、いわゆる閉塞性肺疾患が肺高血圧→肺性心→右心不全へと進展するメカニズムを解明するため、剖検肺に様々な工夫をして検索した結果、直径1mm以下の細気管支の狭窄、閉塞が重要な因子となっていることを見出しました。

旭川に附属病院教授として着任して以来、病院や検査部の創設という仕事に直面し、上述したような仕事を継続することは困難となり中断せざるをえない事情となりました。その後は臨床検査を中心とした多変量解析や、人工知能を応用した病態解析理論の構築に意を注ぎました。

検査部での最大の問題点は、配置される検査技師数が少なく、わずか16名という人員では、毎年爆発的に増加し現在1,300を越える検査項目数に対応できないという点にあります。病院当局の御理解により設備、施設は比較的充実したものとすることができましたが、矢張り人員不足は致命的な欠陥として将来に残ることが懸念されます。

平成元年度には我々の念願であった臨床検査医学講座が本学に設置されました。これは歴代学長の御尽力と、教授会諸先生の御理解と御支援の賜ものと感謝しています。同講座は私立大学では終戦後、臨床病理学講座として次々と設置されました。これは米国での Clinical Pathology の考えを継承したものでありました。それは病理形態学では取り扱わない臨床検査の分野を統合し発展させるものでありました。しかし国立大学では昭和56年に大阪大学に設置されたのが最初で、翌年に新潟大学と以後続々と設立されましたが、本学のような新設医大では本学と愛媛大学が口火を切ったこととなります。

臨床検査医学講座は、生化学、血液学、血清学、微生物学等の智識と技術を基盤とし、①新しいより有効な臨床検査法の開発、②各種臨床検査法の技術的、臨床的評価、および③病態解析理論の確立であると考えています。講座の設置後、数年で本学を去らなければならないのは残念ですが、この若い研究領域は今後飛躍的發展をなすものと信じ、期待しています。

昭和60年から2年間、附属図書館長を命ぜられ、その間大学のあり方に関して自己点検と評価をするための、大学年報を発行することとなり、そのための委員会を組織し、委員会案をまとめ、今日まですでに第2号が発行されていることも、思い出の一つとなっています。

私にとって旭川は第2の故郷となり、旭川医科大学は第2の母校となりました。この新しい大学が年と共に発展し、充実することを念願して止みません。



(最終講義)



退官にあたって

— 創業と守成といずれが難きか —

生物学教授 美 甘 和 哉

退官にあたって、ここに一文を寄せる機会を頂いた。最後の機会なので、創設期から今日まで、私がこの大学をどのように見て来たか、率直に記させて頂きたい。

表題は、唐の太宗李世民が近臣に施政の大綱をただした言葉である。「古より業を創めてこれを失うものは少く、成るを守ってこれを失うもの多し」。太宗は剛直の臣魏徴の言を容れて守成の困難を戒めとし、唐代300年の礎を築いたと言われている。私は、本学の創業期の困難を体験して、それが甚しく不如意に満ちた辛いものであったことをよく心得ている積りである。しかし、今や、艱難のなかに築いた貴重なものが失われて行くように感じられて、守成の難しさを思わざるを得ない。本学も一旦設立されたからは、欧米の著名な大学のように何百年も続く堂々たるものになってもらいたい。創業期の何十倍も長い守成期の真の難しさに対処できる大綱をしっかりと建ててこそ、揺ぎない伝統と輝かしい歴史を築くことが出来るのではないであろうか。

さて、本学の創業期は何時終り、守成期は何時始ったのであろうか。異論があるかも知れないが、私は、一期生が卒業した昭和54年3月をもって創業期を終り、大学院が開設された同年の4月をもって守成期が始ったと考えている。本学の大学院は、まさに薄氷を踏む様な危機を経てやっと認可された。私も大学院設置委員の一人として、この創業期最後の大難所を越えた時の喜びは実に大きかった。しかし、私の見るところ、その頃から大学は足踏みを始め、やがては地盤沈下をきたし始めた。

本学は、後続十数校の国立新設医大のトップを切って出発し、色々な点でそれらの手本になった輝かしい時代が確かにあった。ところが、本州の刺激の多い環境の中で十分揉まれている後続校が着実に力を蓄えて来たのである。本学が次々と遅れをとって来ても、「夜郎自大」をきめ込んで、相変らず新設医大のリーダー格であるかのような神話を信じる人が学内に多かったのは残念であった。やがて、総てを大過なく過ごそうとする穏健派や慎重派が主流となると、大学の運営はことごとく右顧左眄して石橋を叩くのみ、余程強い外圧が無ければ自ら動き出そうとはしない受身態勢となってしまった。その結果、新設らしい意欲に満ちた後発医大群に大きく水を掛けられてしまったのは当然である。

例を挙げれば限りがないが、一番解り易いので医師国家試験を例に取ってみると、ここ数年合格率が甚しく低下してしまった。元来、医師国家試験は合格者が80%以上にな

るように調整されていて、医師としての最低必要レベルの知識を試すものであるから、司法官試験や公務員試験と比べるとはるかに易しいものである。真面目に勉強して卒業出来た者であれば、合格するのが当たり前ではないか。明らかに、卒業認定基準を甘くしている教官や安易にかまえる学生達が凋落の責任者だと思うが如何であろう。かつての我が大学には、二流のレッテルを跳ね返えそうとする気迫が満ちていた。今は、三流に甘んじる無気力が色々なレベルに浸透してしまったように思われてならない。

最近、我が国の大学が次世代育成の責任を自覚していない、と言う識者の批判が頻繁になった。近頃の大学の実情をみれば当然である。かつて、ライシャワ氏が日本の大学の4年間は時間の浪費であると断じたが、残念ながら反論の言葉もない。いよいよ、大学の自己評価が表立って実行され始めた。本学もやっと自己評価委員会を発足させようとしている。外圧によらずに始めてもらいたかった。是非、曖昧なお茶濁しに終らせないでもらいたい。欧米の大学には、教官でも学生でも安逸を貪る者を排除するシステムが確立している。特に医学校ではそれが厳しい。医師の社会的責任の重さを考えれば当然であろう。

大学の自己評価には、教官の業績評価だけでなく、カリキュラムの再評価も是非やってもらいたい。教育機関の背骨であるから大事である。先年のカリキュラム改正はまだまだ生温い。医学教育の先見性にも欠けている。医学の急速な進歩や医師の質的向上を求める社会の要望に答えられそうもない。確かな改善もあったが一部に過ぎなかった。真面目な学生の中に、勉強意欲を殺されると言う声があることに、大学当局は是非耳を傾けてもらいたい。さらに言えば、大学院の制度も他大学と比べて遅れたままではないのか。

大学の未来の栄光を願い、敢えて苦言をもって守成の難しさを述べた。私の真意を一人でも多くの方が汲み取って下さるよう希って、退官の辞とさせていただきます。



(最終講義)

助教授に昇任して

内科学第二講座 衛藤 雅昭



私は本学の一期生で、昭和48年に入学し昭和54年に卒業しました。卒業と同時に、本学第二内科に入局し、初代教授の故石井兼央教授の御指導を受けました。昭和63年に故石井教授が停年

退官され、牧野勲教授が二代目教授として赴任されました。平成元年から二年間米米に留学する機会を与えられ、昨年8月に帰国致しました。此度、牧野教授の御高配により第二内科の助教授に任ぜられました。

「かぐらおか」に何か感想を書いてくれと、同期生の皮膚科の松尾助教授から執筆依頼を受けたのでありますが、このような文章を書くのは苦手でありまして、拙文をお許し頂ければ幸いです。感想ですが、医局で年齢が二番目というだけでその資格はあるのだろうかと常に自問してききましたが、最近はその責任の重さをひしひしと感じている次第です。また、苦勞の多かった大学の創設期より無知なる私を教育、指導して下さいました、学長先生はじめ本学の諸先生たちおよび第二内科の諸先輩たちに深く感謝の意を表したいと存じます。今度は私自身

が後輩を指導する立場となり、全力を尽くす所存であります。

大して業績もない私ですが、この機会に大学人としての考えを少し述べてみたいと存じます。医科大学の使命には教育の他に診療と研究があります。最高の医療を求めて、病める患者さんは大学病院を訪れている訳ですから、大学人としてそれに答えるよう日夜研鑽に努めなければならないのは言うまでもありません。高レベルの医療を保つには、高レベルの研究をする必要があると確信して今日まで努めてきたつもりでいます。私の専門分野は糖尿病、高脂血症、動脈硬化症であります。10年ぐらい前、私が当初発表した研究は国内では余り関心をもたれなかったようでした。それで英文 journal に投稿し続けて参りましたが、やっと最近少しは認められたと思っています。日本では出身大学で評価されがちで、local な大学にはハンディーがあるような印象をもっていますが、本学を世界に出すには originality の高い研究成果をどしどし英文で発表することだと確信しています。大学はじっくり研究するのに適した環境にあると言えますので、できるだけ多くの若い先生方が本学に残り研究に従事されることを切に望むものであります。

諸先輩をさしおいて、とりとめもないことを書いて恐縮しています。今後とも御指導、御鞭撻よろしくお願い致します。

スキー教室で留学生と交流深める

今年も12月16日(月)・17日(火)の両日にわたり旭岳スキー場においてスキー教室が実施された。

北海道の代表的なスポーツであるスキーを通じて、自己の健康管理、技術の向上、自然に親しむとともに、本学学生と外国人留学生との親善交流を目的としたこのスキー教室に、留学生4名を含む34名が参加した。

1日目(16日)は、参加者全員が旭岳スキー場において、上級・中級(2班)、初級の4クラスに分れて講習が行われ、上級のクラスは講師と共に優雅な滑りを披露し、



(旭岳ロープウェー駅前にて)

中級クラスは真剣な表情で講師の後を追ひ、初級クラスは講師の個別指導をうけながら雪と親しんでいた。留学生も技術に応じたクラスに入り、本学学生といっしょにスキーを楽しんだ。

2日目(17日)は、ゲレンデコースのほか、歩くスキーによる自然観察コースもあり、北国の冬の自然を満喫した。

また、16日夜は宿泊地の天人峡温泉で親善交流会が行われ、ユーモアを交えた自己紹介や、日本語・外国語が飛びかう会話などで大いに交流を深め、予定の時間がオーバーしたほどの盛況であった。



(木の洞より自然観察)

平成3年度

1年のあゆみ

4月

- 5日 平成3年度入学式 (於 体育館)
(新入生101名(うち女子学生16名))
- 15日 新入生研修 第1回目
- 16日 (於 第2~4セミナー室、和室)



(入学式)

5月

- 14日 医師国家試験合格者発表
(本学合格者121名、合格率88.3%)

6月

- 13日 第17回医大祭
- 16日 テーマ:『起死回生』
(医大祭実行委員会委員長 薄井宏樹)
- 28日 学位記授与式 (於 第2会議室)
(学位記被授与者 8名)



(医大祭 医学展「救急蘇生」)

7月

- 5日 第38回北海道地区大学体育大会
- 7日 (当番校 北海道大学)
〔本学参加種目〕陸上競技(男女)、準硬式野球、バスケットボール(男女)、バレーボール(男)、サッカー、卓球(男女)、バドミントン(男)、剣

道(男)、弓道(男女)、軟式庭球(男女)、ハンドボール

成績:男子総合11位

- 21日 第34回東日本医科学生総合体育大会夏季大会
- 8月11日 (主管校 東京慈恵会医科大学)

〔本学参加種目〕陸上競技(男女)、準硬式野球、硬式庭球(男女)、軟式庭球(男女)、卓球(男女)、バレーボール(男女)、バドミントン(男女)、サッカー、バスケットボール(男女)、柔道、剣道、弓道、空手、水泳(男女)、ゴルフ

成績:総合17位



(地区体)

8月

- 8月1日 第34回東日本医科学生総合体育大会冬季大会
- 3月25日 (主管校 慶応義塾大学医学部)
〔本学参加種目〕ラグビー、スキー、アイスホッケー
- 7日 平成3年度納骨式(於 本学納骨堂)

9月

- 4日 体育大会(主催 学生)
〔競技種目〕サッカー、バスケットボール、ソフトボール、綱引き、リレー、駅伝



(体育大会)

- 25日 平成3年度解剖体慰霊式並びに文部大臣感謝状伝達式 (於 体育館・第4セミナー室)
 30日 学位記授与式 (於 第2会議室)
 (学位記被授与者 6名)



(解剖体慰霊式)

10月

- 3日 平成3年度公開講座
 31日 「老年期をすこやかに」
 28日 新入生研修 第2回目
 11月1日 (於 第3～4セミナー室)



(新入生研修)

11月

- 5日 本学記念日

12月

- 16日 スキー教室 (於 旭岳スキー場)
 17日 講師5名、厚生補導委員会委員長
 参加学生34名
 25日 学位記授与式 (於 第2会議室)
 (学位記被授与者 2名)



(スキー教室)

1月

- 11日 平成4年度大学入学者選抜大学入試センター試験
 12日 (本学会場 669名)

2月

- 7日 美甘教授最終講義
 20日 石橋教授・牧野(幹)教授最終講義
 24日 平成4年度大学院入学者選抜試験
 27日 小野寺教授・保坂教授最終講義

3月

- 5日 平成4年度入学者選抜第2次試験
 6日 (受験者 541名)
 11日 石橋教授・小野寺教授・保坂教授・牧野(幹)教授・美甘教授歓送式
 12日 平成4年度大学院入学者選抜試験合格者発表
 19日 平成4年度入学者選抜第2次試験合格者発表
 25日 博士学位記授与式 (於 第2会議室)
 (博士学位記被授与者24名)
 平成3年度学士学位記授与式 (於 体育館)
 (学士学位記被授与者 113名)



(退官教授歓送式)

原田教授「旭川市文化奨励賞」受賞

去る11月3日の「文化の日」に、旭川市から歴史の原田教授へ旭川市文化奨励賞が贈られました。

この賞は、旭川市の文化の向上発展のために、多大な貢献をされた個人及び団体に贈られるもので、原田教授は、永年にわたり歴史の研究に情熱を注がれ、特に北海道全般の地域史研究において優れた著書・論文を発表するとともに、新しい北海道史の編集者として活躍され、更に、旭川市開期百年を記念する「目で見える旭川の歩み」の出版に貢献されたことにより受賞されました。

(学生課)

新歓合宿のお知らせ

毎年恒例となった「新人生歓迎合宿」を、今年も4月11・12日に行くことになりました。予定内容としては、まず現場で働いている先生を招いての講演（今年は第2外科の葛西先生をお招きします）、各クラブの紹介など（めちゃくちゃおもしろいよ!!）が、まず学校で行われます。その後、温泉宿まで出向いて、先輩方と語るグループ討論会（先輩方の失敗談が聞けるかも?）、新人生全員の自己紹介（去年はバック転した人、恋人宣言をした人など、いろいろといましたよ!!）、クラブ勧誘（しつこいよ!）、そして皆で飲み明かすのだ!!とは言っても、寝たい人は布団もあるし、無理に飲ませないから、救急車の心配もありません（万一のことがあっても、先輩が助けてくれます）。

と、まあ書きつづりましたけど、このおもしろさは、まさに「百聞は一見に如かず」です。ぜひ参加して、このおもしろさを実際に自分の肌で体験して下さい。

(新入生歓迎実行委員会より)

学生団体の設立・継続届について

平成4年度において、新しく設立しようとする学生団体、もしくは活動を継続しようとする団体は、4月30日(木)までに設立届または継続届を学生係に提出して下さい。

なお、継続届の提出がない学生団体は、解散したものととして処理するので注意すること。

(学生課)

病院ロビーでクリスマスコンサート行われる

室内合奏団と合唱部によるクリスマスコンサートが12月20日(金)・21日(土)の両日、附属病院ロビーで行われた。

このコンサートは、「日ごろの練習成果を発表するとともに単調な入院生活にひとときの憩いの時間を過ごしてもらおう」と学生のクラブ団体が毎年この時期に開いているもので、両日とも、入院されている方や看護婦、教職員ら約200人が美しいメロディーに聞き入っていた。



(室内合奏団のコンサート風景)



(合唱部のコンサート風景)

(学生課)

教官の異動

昇任

◎H3.12.1. 内科学第二講座 助教授 衛藤 雅昭

◎H4. 2.1. 公衆衛生学講座 助教授 平山 博史

(庶務課)



平成4年度の地区体について

平成4年度の北海道地区大学体育大会は、本学が当番校となり実施することは「かくらおか」の67号でお知らせしましたが、日程・会場・分担大学が下記のとおり決まりましたので、お知らせします。

なお、硬式野球、バスケットボール、卓球、バドミントン、ハンドボールの5種目については、私立大学の協力により分担大学として大会を実施していただくことになりました。従って本学関係クラブ員については直接運営に参画する必要はなくなりましたが、主将会議（組合せ抽選）等の作業は協力していただきたいと考えております。

また、今後のスケジュールについては5月中旬顧問教官・主将会議、5月23日(土)第1回主将会議、6月中旬競技団

体(協会)との打合せ、7月10日(金)総合開会式及び第2回主将会議を予定しています。

大会運営に当たっては関係クラブのほか、全学の教職員及び学生諸君の協力が必要となりますので、絶大な協力をお願いします。(学生課)

実施種目別分担大学一覧

分担種目名	性別	分担大学
硬式野球	男	札幌学院大学
バスケットボール	男女	旭川大学
卓球	男女	北海道工業大学
バドミントン	男女	北海道東海大学旭川校舎
ハンドボール	男	北星学園大学

第39回(平成4年度)北海道地区大学体育大会開催期日・種目・会場

開催期日 平成4年7月11日(土)～13日(月)

総合開会式 平成4年7月10日(金) 16時～旭川医科大学体育館

番号	開催種目名	性別	2日 (木)	3日 (金)	4日 (土)	5日 (日)	11日 (土)	12日 (日)	13日 (月)	競技会場
1	陸上競技	男女						○		旭川陸上競技場
2	硬式野球	男	○	○	○	○				札幌学院大学総合グラウンド野球場
				○	○					江別市営球場
3	準硬式野球	男					○	○	○	旭川スタルヒン球場
							○	○		旭川医科大学野球場
4	軟式庭球	男女					○	○		旭川花咲テニスコート
5	バスケットボール	男					○	○	○	旭川市総合体育館
		女					○	○	○	旭川大学体育館
6	バレーボール	男					○	○	○	旭川大雪アリーナ
		女					○	○	○	旭川市総合体育館常盤分館
7	サッカー	男					○	○	○	旭川市富沢運動広場
							○	○		旭川医科大学サッカー場
8	卓球	男女						○		北海道工業大学体育館
9	バドミントン	男女					○	○	○	北海道東海大学旭川校舎体育館
10	柔道	男						○		旭川市総合体育館
11	剣道	男女						○		旭川医科大学体育館・武道場
12	弓道	男					○			旭川医科大学弓道場
		女						○		
13	ハンドボール	男			○	○				札幌市豊平区体育館

※7月13日(月)旭川市総合体育館・常盤分館は休館のため当日会場を移動して実施する。

課外活動短信

サイクリング・クラブ「ちゃりんこの会」

第5回 ツール・ド・北海道 3年10月4日

第4ステージ 一般個人ロードレース 37km

5位入賞 木村 圭介

アイスホッケー部

第34回東日本医科学生総合体育大会冬季大会

栃木県日光市 3年12月26日～30日

Aリーグ 3位 (総合3位)

[昨年 Bリーグ優勝(総合6位)]

個人賞 新人賞 高橋 淳一

ポイント王 千里 直之

ベスト6 土居 忠



「旭川医大に留学して」

談 勇

私は1990年10月、研究留学生として旭川医大に来てから1年4ヶ月が過ぎました。

南京は中国の古都として皆さんご存知の通りですが、母校の南京中医学院は北京および上海中医学院と並んでWHOから伝統医学、acupunctureの教育研修センターに指定されている3大学の1つです。大学は、人口300万人の南京市内でも一番賑やかな街の中心部にあります。

旭川に着いて、市内を静かに流れる石狩川や、雄大な大雪山系を眼にした時、騒々しい南京と比べ何と爽やかなところかととても印象的でした。

夏にはラベンダーの紫、ポピーの白や赤、ビートや牧草の緑が美しく、秋には濃緑のエゾ松や、白樺、紅葉等によって織り成される多彩な絵のようです。近くの森では小鳥が「羽衣の滝」の神話を伝えるかのように囁り、田畑では農作物が整然と収穫の時を待っています。冬になると一面は白銀の世界に変貌します。

旭川医大はあたかも大雪山や十勝連峰の裾野に広がる庭園のようで、構内の緑の芝生は真赤な夕焼け空のもとに美しく照り出されます。夏の晴れた日にはリハビリ丘の散歩を楽しみ、冬の寒い朝には医局で熱いコーヒーを味わいながら、窓越しに白い雪山を眺望でき、「なんと美しい田園都市、なんとすばらしい別荘大学でしょう」と何度も感慨にふけたことでした。

この1年余、豊かな自然の恵を受けながら、有意義な研究生活を送らせて頂きました。

歴史的にみて中国伝統医学(Traditional Chinese Medicine)と日本の医学は切っても切れない関係にありましたが、明治以降の医学教育改革で、長い間中国医学が遠ざけられてきました。本当に寂しいことです。しかし旭川医科大学には中国医学についての豊富な知識をもたれている先生が少なくなく、熱心に研究されている先生も多くいらっしゃいます。私は麻酔学教室に着いたばかりの時、教室に「漢日辞典」、「日中大辞典」、「中国漢方医語辞典」、「中英辞典」等の辞書類や、中国医学の研究に必要な書籍が多数用意されているのにびっくりし、また一番嬉しいことでもありました。教授の豊富な中国成語の知識に驚かされ、温和な口調によるご懇篤なご指導に支えられて、楽しくかつ意義深い留学生活を送っております。教室の皆さんや事務の方々にも親切にして頂き、また熱心に手助けして頂いたことに感謝しております。こうして訪日前に抱いていた緊張や不安感是完全になくなりました。

私は約8年前、亡き祖父の著書を翻訳して頂いた日本の友人がいることを聞かされてから、日本への留学希望をずっ

と持ちつづけておりました。これまで長い間、医療の実践に当たっていましたが、難治性疼痛をもつ多くの患者さんに大変悩まされ、中国におけるペインクリニックの遅れが一層留学の希望をつのらせたことでもありました。1990年4月、小川教授が訪中された折り、私達の大学で「日本における疼痛治療の現状」というすばらしい講演を聴かせて頂いたのが縁で、夢にもみた留学が実現することになったのです。しかし来日前は、神経ブロックの知識は全くゼロの状態でありました。ここ1年間に硬膜外、くも膜下ブロックはもとより、胸部、腹腔、腰部交感神経節ブロックなどの高度の各種神経遮断術を見学させて頂き、日常的な星状神経ブロック、仙骨ブロックなどの手技のコツも繰り返して教えて頂きました。そのほかに、教授は西洋医学と中国伝統医学の両者を結合させた診かた、考えかたで有効な除痛手段の研究を進められておられます。私の本来の専門である産科婦人科の接点でも、辺縁科学(frontier science)に関する面で新しい発想ができ、これが私にとって何よりの収穫でもありました。またこの1年間に6回も学会に参加させて頂き、また3回論文を発表させて頂きました。毎回つたない発表文章を教授が睡眠不足を顧みず直して下さったことや、色々な機会に人の生き方、過ごし方、趣味のもち方、勉強の方法等、さまざまな面で教育を受け、これらは一生涯忘れることができません。

仕事と研究の面から、教授は極めて厳しい先生として尊敬されているかわら、患者さんからは誠にもって親切な先生として慕われています。学生とも密に接し、教育熱心な上に大変温厚で人情味豊かな教授であると感銘させられました。医局の先生方や、秘書の人達も仕事あるいは生活上の色々な面で大変お世話になっており、患者さんには誠心誠意、奉仕の精神でのぞむといった崇高な考え方で接しておられます。

早くも1年余が過ぎてしまいましたが、このあとは研究面でも、人間としての自己の成長面でも、どのような進展、展開がみられることでしょう。visaの延長手続きのため市役所に行く道すがら、旭川の市樹であるナナカマドの真赤な実を眺めながら、魯迅の「希望とは、もともと有るような無いようなものである。それは地上の道にたとえられる。地上にはもともと道はない、歩く人が多ければ道は出来てゆく」という言葉を思い出しました。開期100年の旭川の街路、創立18年の若々しい旭川医大の構内通路を歩みながら、残る期間はペインクリニックの研究のために懸命に歩き続けようと考えています。新しい道が開かれるようにと望みながら……

平成4年度 前期分授業料免除 及び延納・分納について

平成4年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する者で、下記基準のいずれかに該当すると思われる者は、教務部学生課厚生係で必要書類を受け取り下記の期間内に申請すること。

なお、申請者については、選考の間授業料の納入を猶予します。

また、不明な点は、同係に問い合わせ願います。

記

1. 授業料免除基準

- (1) 経済的理由によって授業料の納付が困難であり、かつ、学業優秀であると認められる場合
 なお、平成4年度において原級に留置されている者又は、最短就業年限を越えて在学している者は、免除の対象としない(休学の理由による者を除く。)
- (2) 授業料納期前6月以内(新生生については、入学前1年以内)において学生の学資を主として負担している者(以下「学資負担者」という。)が死亡し、又は本人若しくは学資負担者が風水害等の災害を受けたことにより、授業料の納付が著しく困難であると認められる場合
- (3) (2)に準ずる場合であって、学長が相当と認める事由がある場合

2. 申請書類

- (1) 授業料免除申請書
- (2) 学資負担者が死亡した場合は死亡診断書
- (3) 災害を受けた場合は罹災証明書(市区町村、警察、消防署が発行したもの。)
- (4) 市区町村発行の所得証明書(給与所得者については、平成3年分の源泉徴収票を、給与所得者以外については、平成3年分の確定申告書(一面・二面)等の写し(生計を一にする家族全員分)を、また、学資負担者が死亡した場合は、死亡前の所得証明書を併せて添付すること。)
- (5) 失業者は、民生委員又は職業安定所の証明書
- (6) 生命保険金の支払いを受けた場合は、当該保険会社の保険金支払証明書
- (7) 家族の中に就学者がいる場合は、その者(申請者本人及び義務教育の就学者は除く。)の在学証明書
- (8) 自動車保有に関する申立書
- (9) その他家庭事情により参考となる証明書等

3. 申請期間

- (1) 在学生……………平成4年2月17日(月)
 ～3月31日(火)
- (2) 平成4年度入学生……………平成4年4月1日(水)
 ～4月20日(月)

平成4年度 日本育英会奨学生の 募集について

日本育英会は、優秀な学生で経済的理由のため就学困難な者に学資を貸与しております。

本学では、日本育英会からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本育英会へ推薦します。

ただし、日本育英会では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

奨学生の募集要項を、4月上旬に公用掲示板に掲示しますので、貸与を希望する者は、提出期限に遅れないよう所定の書類を教務部学生課厚生係に提出してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、同係に相談してください。

学生教育研究災害傷害保険の 加入について

本学は、学生の正課中・課外活動中における災害事故補償のために「学生教育研究災害傷害保険」の賛助会員大学となり下記のとおり加入受付事務等を行っています。

本保険は、学生の互助共済を基本として運営されており、学生生活中の万一の場合に備え、できるだけ全員の加入を勧めています。

まだ加入していない学生は、加入するようにしてください。

記

1. 受付期間 自 平成4年4月1日(水)
 至 平成4年4月30日(木)
2. 受付窓口 教務部学生課厚生係
3. 保険料 6年間 3,400円
 5年間 2,950円
 4年間 2,450円
 3年間 1,900円
 2年間 1,300円
 1年間 750円
4. 支払い保険金の種類と金額

区分 種類	正課中 学校行事中	学校施設内の休憩中 学校施設内外の課外 活動中(学校施設外の 課外活動については、 大学に届出た活動に 限る。)
死亡保険金	1,200万円	600万円
後遺障害保険金	54万円～1,800万円	27万円～900万円
医療保険金	実治療日数4日以上 が対象 6千円～30万円	実治療日数14日以上 が対象 3万円～30万円
入院加算金	1日につき4,000円	1日につき4,000円

20才以上の学生の国民年金への加入について

国民年金法の改正に伴い、大学に在学する学生で20才以上の者は、平成3年4月1日から国民年金の被保険者（当然加入）として適用を受けることになりました。

従来学生については、20才以後在学中に障害者となった場合、国民年金に加入していない限り障害基礎年金が支給されず無年金となっていました。また、基礎年金制度は、原則として、20才から60才までの40年間加入することを前提に満額の老齢基礎年金を支給することとされ

ていますが、学生は、任意加入とされていたため20才以上の在学期間中に、国民年金に加入していなかったものについては、卒業後年金制度に加入しても満額の老齢基礎年金が受けられませんでした。

このため、国民年金法が改正され、平成3年4月1日から、20才以上の学生も全て国民年金に当然加入することになりました。なお、国民年金への加入の手続き、保険料の納付方法及び保険料の免除等の詳細については、学生課厚生係又は、住民票を登録している市区町村の国民年金担当窓口へ直接問い合わせください。



窓外

林 由紀子

初もののスイカ

1960年代後半、父の転勤により我家は小樽から札幌に転居した。現在の時点から日本の戦後を振り返ると、当時は朝鮮戦争の特需などにより戦後復興の時期を脱し、今日の経済的繁栄へと連なる高度成長の初期という時代だったようだ。新しい官舎は鉄筋コンクリート造りでブロックの塀がめぐらされた、その頃の庶民のレベルでは上の方の家だったらしい。豊平川の川岸にあり、反対側に少しくと平岸にまだリンゴ園があったようだ。私は病気療養中で、歩いて7、8分ほどの病院に週2回通院する以外は家の窓際のベッドから外を見ているような毎日だった。塀のむこうに古くさびれた感じの木造アパートがあり、この二階の窓からも同じように日がな一日外を見ている老人がいた。そのまなざしは暗く押し黙っていて、少しこわいような印象だった。このアパートの管理人から母が聞いたところでは、そこは生活保護を受けている人用の市営アパートで、住人はお年寄ばかりとのことだった。

両親はどこへ行ってもそうするように、この官舎の庭にも花や木を植え、野菜を育てていた。若い前任者のときには、そこはコリー犬の運動場だったらしい。母はほとんど生まれつきの性格とでもいうのか、お年寄で困っている人がいると、何くれとなく心尽しのお手伝いをするくせがあり、奥さんを亡くして一人ぼつねんと二階から我家を見ているこのMさんにも畑の収穫などをおすそ分けしていたようだ。

ある日突然Mさんが我家の玄関に大きなスイカを運んでこられた。そのスイカは初もので、家だけは官舎なの

で立派だったけど、病人を含め3人のスネかじりのいるサラリーマンの家庭では、とてもその時期に得られるようなものではなかった。驚いているらしい母にMさんがこう話されるのが聞こえてきた。「腐らせて捨ててしまうようなものが例えあってもわたらのような者に分けてくれる人はいない。その気持ちが嬉しくて…。これはお礼だから受け取って欲しい」というのだ。金額にすればわずかの野菜に対して、また日頃の生活内容からすればそれは法外な散財だったはず。

何気ない同情心の表明に大袈裟に言えば、平等な博愛精神とでもいうものを感じ、それに最大限の意味を与えたMさんの半生はどのようなものだったのだろうか。このような境遇にありながら、年老いてなおそのスイカのように瑞々しい感性と深い洞察力を保ち続けるMさんにより、病院と学校とベッドの中だけでしか生きてなかった私は、心の奥深く、人間の希求するものを認識させられた。

今このあたりには巨大な商社と、コンピューター付ブルドーザーといわれた政治家の関連会社の建てたマンションがたち並ぶ典型的な中流日本が出現している。「乏しきを憂えず、等しからざるを憂える」という理想が物のレベルではある程度実現されてしまったように見える現在、人間として平等に尊重され生きる自由が物以外の面へどれだけ広げられたのだろう。よかれあしかれ物によりかなり直接的に示されていた人間としての幸不幸が、あふれるような物で意図的に隠されてしまうような状況にあるような気がする。物によって実現された力を得て増々欲望実現のため日夜勤勉に動き廻る人達の傍で、彼らによって利用される人間ばかりでなく、動物も植物も天も地も破壊されていくという。せめて自分は破壊者の側には立ちたくないと思うなら、彼らからできるだけ遠く離れてMさんの声を聞き続けなければならない。それは思ったよりもずっと難しいことのようにだ。

(臨床検査医学講座 講師)